



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

CITATION:

学生の声. Cue 2001, 8: 56-56

ISSUE DATE:

2001-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/57827>

RIGHT:

学生の声

「博士課程における研究生活」

電子物性工学専攻 松波研究室 博士後期課程1年 小野島 紀 夫

同回生の友人のほとんどが就職するなかで博士課程へ進学する決心をしたとき、親も親戚も非常に驚いて、「お前がやっていけるのか？」と聞いてきました。正直に言って、先のことはあまりよく分かっていませんでした。ただ、小さい頃から最先端の科学技術を知り、研究したいと思ってきたことと、大学院修士課程で、研究の楽しさや難しさを味わえたことが大きかったと思います。今、現実に博士課程の学生になって、相変わらず先のことは分かりませんが、充実した研究生活を送っています。

先のことはよく分からないと書きましたが、将来は研究者として海外で働いてみたいという希望があります。学部生だった頃、京都大学ESS（English Speaking Society）というクラブに在籍していて英語漬けの毎日を送っていました。その頃は、漠然と英語を自由に操れるようになりたいと考えていましたが、現在はモチベーションが違います。国際会議での公用語は英語だし、投稿論文も英語で書きます。学部生の頃と比べたら時間に余裕はありませんが、実際に使える英語を身につけたいと思っています。

最近、博士課程の間に身につけたいと思うことがたくさんあります。素晴らしい研究成果を得ることも大事ですが、日頃お世話になっている装置が故障したときのメンテナンスや管理の仕方なども重要だと思います。また、研究仲間と協力したり、一緒に難しい専門書を勉強したりするような協調性も大切です。いろいろ考えていると博士課程はあっという間に過ぎてしまいそうです。博士課程で研究できるということはとても貴重で、その機会を与えて下さった研究室の先生方や両親に感謝の心で一杯です。同回生の友人たちより、社会の舞台に出て行くのは遅くなるけれど、将来に向けての貴重な助走期間だと考えて、これからも博士課程における研究生活を送っていきたいです。

「電気系での学生生活」

エネルギー社会・環境学専攻 吉川（榮）研究室 博士後期課程1年
伊 藤 京 子

吉川（榮）研究室に配属されて以来、3年半が経ちました。宇治に通うのにも随分慣れてきていたところ、今年から、吉田キャンパスにも部屋が加わり、医学部構内の先端科学棟を拠点に研究をすすめています。当研究室では、ソフトウェアからハードウェアまで、広くヒューマンインタフェースの研究を行っており、私の場合、卒業研究では「会話型エージェントによる学習支援システムの研究」、修士過程では「アフェクティブインタフェースのための表情・音声合成による感情伝達手法に関する基礎研究」という表題で論文を執筆しました。博士課程に進学してからは、ネットワークコミュニケーション上での場の形成や話し合いなどに着目し、Webベースで様々な人が参加できる議論の場の枠組みを検討していく予定です。

女子学生の数が非常に少ないのが電気系の特徴の一つですが、学部学生当時、私の学年では140数名中2名、研究室では、修士課程修了時まで20数名中1名でした。高校以来、理系で過ごしてきましたが、このように少数なのは初めての経験で、「当たり前に思っていること」の感覚が大きく異なり、非常に戸惑いました。また、自分の性別が異なっていることも強く感じさせられました。他の電気系所属の女子学生とも、そのような違和感について話してきました。「世界は男女両性で構成されており、どちらが欠けても不十分である」とはよく言われることですが、電気系にも女性の視点が入り入れられれば、学部も活性化し、研究に関しても新たな方向性が見いだせる可能性があると思います。

今後、電気系でも女子学生の割合が増えること、そしてその人たちが勉強も研究もより楽しめるような環境を得られることを、強く期待します。私自身も、課程修了まで残り2年半となりましたが、自分の目指す方向を探し、研究することを存分に楽しむ学生生活を送りたい、そして、将来への道を切り開いていきたいと思っています。

がんばります。